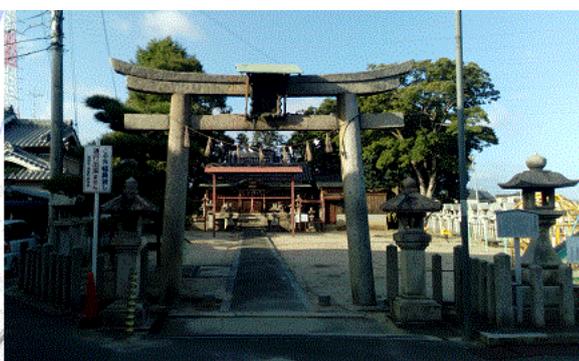


## 校名「大冠」の由来

大冠高校の校名は1931年に高槻町と合併する前のこのあたりの旧村名が「大冠村」だったことに由来しているようです。もともと室町時代頃には、学校より1～2キロ北のあたりを中心に冠庄と呼ばれる荘園があり、その後も冠村という地名が明治頃まで使用されていました。1889年全国に町村制が施行された時、付近にあった12の村が合併して1つの大きな村になりました。その時、村役場がおかれたのが江戸時代に「冠村辻子」と呼ばれていた集落だったため、冠村を中心にさらに大きくなった村ということで「大冠村」と名付けられたのでした。ちなみに江戸時代初期の古地図をみると、学校のある付近は冠村の南にあった大塚村の村域内に位置するようです。



↑  
冠須賀神社

←学校周辺の地図

もっと古い時代の記録を見ると、この付近は柳の名所だったらしく、平安時代の『うつほ物語』や小倉百人一首の歌人である恵慶法師の歌集に「かうぶり柳（冠柳）」について詠んだ和歌が残されています。当時、都の貴人が難波から京都へ向かう時は、淀川の舟運を利用していました。紀貫之の『土佐日記』には、下流から遡った舟を柱本（現在の高槻市南部の地名）付近から岸伝いに引っ張らせて進んだ記事が見えます。恐らく河岸には舟を引く人たちが涼をとるために柳が多く植えられており、それが貴族たちの詠む和歌の題材となっていたのでしょう。

江戸時代の旅行ガイドブック『摂津名所図会』には、「かうぶり柳」は、かつて冠須賀神社（高槻市須賀町）に植えられていたもので、枝の形が貴族の冠に似ていたことからその名がついたという説を紹介しています。一方、学校の約1キロ東北にある大塚神社（高槻市大塚町）には、平安時代前期、清和天皇がここに立ち寄った際、松の木に冠を掛けたまま忘れてしまったという話が伝わっています。どちらも言い伝えの範囲を超えるものではありませんが、校名の由来が平安時代に遡る歴史性のあるものだということは確かな事でしょう。  
(2019年10月16日)